

女子教育に関する一つの考察（第六報）

—室町時代の芸能にみる庶民の女性—

岡 ヤ ス 子

(家庭科教育研究室)

An Inquiry into the Women's Education (6 th report)

—The Common Women Observed Through the
Performing Arts in Muromachi Era—

Yasuko Oka

I 室町時代の世相と文化

1. 室町時代の特色

1336年足利尊氏は京都に幕府を開き、優れた政治力で自家の権力を強めたが、尊氏から新たな権限を与えられた近畿諸国の守護をはじめ地方の守護は領地に根をおろして在地の武士と主従関係を結び、次第に成長して大領主としての実力を握り、幕府の意のままにならなかった。

1368年義満は三代将軍となるに及んで、地方の反幕府の豪族や守護職を討って足利幕府の全盛期をつくりあげ、日本最高の権力者となった。義満は対明貿易の発展に力を注ぐなど政治に関心を示したが、1397年京都北山に金閣をたてて貴族的生活にふけた。そのため明貿易によって富を貯えた京都・堺・博多などの商人のみならず、寺社・武士の所領に対して、また農民にも特別の租税を課したので特に一般民衆は負担に苦しむこととなった。日本書紀に「庶民の上につつ大夫は民のために、民のための政治を行う」とあるがしかし古代より上・中・下品三階級に分けられ、下品に属するものとされた庶民（多くは農民）は権力のもとに呻吟し、教育・文化から、隔絶された環境で生きて来たと考えられる上、室町時代には重税を背負うこととなったが、一方当代においては、現実主義・功利主義の思想が強くみられ、義満の死（1408年）後はし

ばしば徳政を要求して民衆蜂起を実行し、堺の如きは町人の自治が行なわれ、1428年近畿に土一撥が起きた後の半世紀の間各地で土一撥を起こし、農民は村落間の協同と団結によって村政の自治的運営を行なうようになった。また時代の進展にともない農村においては鉄製農具の普及、牛馬の耕作利用、水車による灌漑など農業技術の進歩による生産力の上昇をみるにいたった。その他室町時代庶民の教科書として用いられた多くの往来物の一つ「庭訓往来」によれば鉱工業、手工業、醸造業などの発達による生産力の増進、また交通機関の発達による商業の繁栄などにより、商人・職人・農民など一般民衆の社会組織における地位は次第に向上した。このことは彼らの間に芽生え育った文化の向上を捉し、庶民文化は農村、地方都市をとわず地域的・階層的に拡大した反面貴族文化はその影を薄くした。このことは文化の下剋上といえるが、やがて両文化は互に融合し、さらに武士階級の間で洗練されて民族的文化といわれる室町文化を形成した。

2. 室町時代の文化

室町文化の形成について見逃すことのできない要素のいま一つは仏教である。鎌倉時代の新興仏教は当代に到り、階級を超越して普及し、学問・教育・芸術さらに実生活を支配するなど各方面に精神的・物質的な影響を及ぼした。従って芸能・文学などには仏教信仰を内容とするものが多い。

(1) 芸 能

① 猿楽能(能楽)

11世紀から農村において発達した田楽と、物まね曲芸などで観衆を笑わせた猿楽とが結合し、演劇的能力をもった芸能者集団によって13、4世紀に神社を本所として維持発展した芸能である。諸集団のうち、春日神社を本所とする結城(後の観世)、金春、宝生、金剛の四座が特に発展した。(後世喜多か加わる)殊に観世座は観阿弥、世阿弥親子の天才的才能と、義満の後援によって大成し、民衆芸能から幕府の式楽となった。しかし能の世界の女性は遊女から貴女にいたるまで殆んど演出の前場ではひなびた里の女など親しみやすい人物として登場することは、本来の民衆性を失っていないためといえる。能には夢幻能と生きた人間の世界を描いた現在能とがあり、構想は殆んど一定の類型に従っている。夢幻能の人物は物語などで有名な美女や貴公子または武将であったり、罪業のためあの世で苦しむ亡者であったりする。神仏や草木の精のこともあるが、すべて「シテ」の過去の懐旧談の形をとり、死・亡者・念仏・回向・成仏を内容とする曲目が多い。舞と謡との融合した妙味を感じさせ、幽玄の趣を追求する芸能である。曲目「班女」「江口」などで演出される遊女たちは悲しい現実に泣きながらも、恋する男と再会の喜びを得たり、念願の通り成仏をとげる結果をみせていることは注目すべきことで、そこには神社や貴族に人身的に隷属する関係を解き放す民衆の機運があったためといえよう。

② 狂 言

猿楽から分化し能楽の幕間に演ぜられた科白劇で数人の演者が概ね当代の日用会話をういて演出した。流派としては大蔵流、鷺流(明治時代亡びた)、和泉流の三派があった。主題は「武士・領主に対する不満」、「領主階級の愚かさ」、「民衆性の中にある矛盾や滑稽」など多様である。登場する女性は殆んど庶民の妻女や尼であるが、女性の隷属的でない実体と夫婦関係の新しい様相を生き生きと演出している。女性の多くは古代の文学書にみる女性とは異なり、民主的権利意識をもち、積極的、行動的で思慮のある人物として描写しているものがみられる。

③ 生 花

鎌倉時代以後の武家屋敷の様式は書院造りで、その床の間の存在は生け花、掛軸(絵と書)の発展を促す要因となった。

④ 茶 の 湯

茶の湯の源流は畿内の茶栽培の農民が茶の品評会を催した「茶寄り合い」にあるという。武士や公家の間では茶をたしなむことにはじまり、これに作法が形づくられ、また各地の茶を飲みわけて「かけ」をする「闘茶」の集いが発達した。これら喫茶の作法を基に、村田珠光が義政に召されて形を整え、さらに戦国時代末期堺の商人、千利久によって茶道として大成した。太平記巻三十三の武士の富貴について記した一説に、「抑此人々長者、(略)只寺社本所ノ所領ヲ押へ取り、土民百姓ノ資材ヲ攻メ取り、論人訴人ノ賄路ヲ取り集メタルモノドモナリ。古ノ公人タリシ人ハ賄路ヲモ取ラズ、勝負セズ、囲碁双六ヲダニ酷禁セシニ、万事ノ沙汰ヲ閣キテ、訴人来レバ酒宴茶ノ会ナンドイヒテ対面ニ及バズ、人ノ歎キモ知ラズ……」とあることは武士の間でも茶会が行われたことを示すものである。

室町時代は政治・社会組織の混乱に加えて、仏教の影響もあって隠遁思想がおこり、不如意な世間と隔絶した別天地を求めて静寂を楽しみ、佗を味わうことを希求した人々の存在が茶道および花道を盛んにした一要因と考えられる。

(2) 文 学

・お伽草子

室町時代から江戸時代の初めにかけて数多くの短編物語が作られている。作者に関しては殆んど明らかでないが、平安・鎌倉時代の物語の作者がもっぱら貴族であったとは異なり、僧侶・武士・隠遁者・町人など各階層の人々によって著作されたと考えられ、ここにも下剋上の世相が伺われる。物語の多くは内容が読み易く深い読書力を要しない短編物である点から、執筆者が対象とした読者は庶民をはじめ広い層であったであろうと思われる。これらの短編物語集をお伽草子とっている。お伽とは人のつれづれを慰める話相手などの意に用いられることが多い。従ってお伽草子は、人々の退屈をまぎらし慰めるための読物ということになる。

しかも物語の終わりには、「此物語を聞く人、まして読まん人は……」「此草子を読みて人に聞かせん人は……」とある点から、読んで人に聞かせることが多かったと考えられる。物語の主人公は公家・僧侶・武士・農民・商人など広い範囲に及んでいる。地域としては都を依然あこがれの地として扱ってはいるが、地方を中心とするものも多い。内容は恋愛中心から脱皮し、「立身出世談」「教訓談」「復讐談」「快奇談」および笑話など多種多様で、おかしきや諷刺を含み、総じて無邪気で明るく、庶民性が豊かである。また動植物を擬人化した作品（のせ猿さうし、猫のさうしなど）もある。今日の浦島太郎、一寸法師などの童話はお伽草子をもとにしていると考えられる。

筆者は能楽、狂言、お伽草子を通して室町時代庶民の女子の生活・教養などを考察したが今回は狂言を中心とした内容を報告する。

Ⅱ 狂言にみる室町時代の女性

1. 狂言

狂言については先にも述べたが、14世紀から約200年間の成立流動期を経て、江戸時代には幕府の儀式芸能となり、能の幕間に演出された。登場人物を中心に分類すれば、「大名狂言」「小名狂言」「鬼山伏狂言」「出家座頭狂言」「脇狂言」「女狂言」「髯狂言」などがある。女狂言は夫婦者を扱っているが、この中の「伊文字」では女が「シテ」を演じ、鬼山伏狂言の「比良貞」「庵の梅」でも尼が「シテ」となっているが他の曲目では女性を「シテ」として扱っていない。登場の女性は庶民の妻女が多く、その殆んどは夫に「わわしい女」と云われている。すなわち、女性は働き者で、権利意識をもち、民主的男女関係を意識し、「日どまり、夜どまりして」勤労意欲のない夫を激励し、口やかましいのである。狂言で扱われる題材、登場人物はお伽草子と同じく「親しみやすさ」「軽さ」をもち、健康な笑いを発散する独自の世界を形成している。世阿弥は狂言の演出について、その著「習道書」の「狂言の役人の事」の項で次の如く述べている。「狂言は（略）言葉・風体に卑しいことをしないで貴人のお耳にかなうような気のきいた言葉やしゅれをたしなむべきである。かえすがえすもをかし、であるからとい

って、あまりに卑しい言葉・風体などは決してあってはならない。よく心得よ」と。能との相関関係からの意見と考える。

2. 女性の教育

吉野時代から室町時代にかけては五山をはじめ多くの寺院が教育の中心で、庶民も男子は僧侶から寺院で読み、書きの指導を受けた。女子の教育は公家・武家ともに家庭で行なわれ、庶民の女子教育の場も主として家庭であったと考えられるが、例外もあったことを狂言の内容から推測できる。ようやく目ざめた庶民階層は、自己の地位や面子を維持するためでなく、貧困から自らを救い、人間らしい生活をするを目的とし、知育は重視されたとは考えられない女子にも生活の必要からくらしの中で、読書・簡単な手習い・算道の学習に加えて和歌・連歌・舞踊・裁縫の技などを学んだことを伺うことができる。いつの時代にも音楽は教養として特に女子は稽古したが、狂言では音楽特に器楽の学習については殆んどふれていない。この点お伽草子には絵画・花道のほか琴・琵琶のたしなみのあることを讃えた物語がある。

しかし一般民衆は、琴・花道などの稽古には関心が薄かったと考えられる。理由は、江戸時代1808年著作された式亭三馬の代表的小説「浮世風呂」三編巻の下、町のお上さん同志の対話の中に「花を生けるの、琴をひくのと世帯もちのいらねへ事さ、飯をたいて、着物を縫って、内外の者の身じんまいをして、物にすたりの出ねへやうにすりや、女房の役はたくさん」とあり、三編巻の上では、お角という娘が「母親にすすめられてつづけている手習、琴、三味線の稽古は御奉公に上るためのもの」と述べている。室町時代より庶民文化の進展した江戸時代においても富有な家庭の娘とか、特に芸能を役立てて奉公の道を開く者以外は、琴、生け花などの学習は余りしなかったと思われることから室町期女性の芸能の内容が推測できると考える。

お伽草子の「物くさ太郎」「のせ猿さうし」などでは和歌の心得があって富み栄えたとしており、「猿源氏草子」にも「子孫繁栄なりしも、歌の道あさからざりし故なれば、人ごとに学び給ふべきは歌の道なるべし」とある。「三人法師」の中でも「歌の道には、いかなる恐ろしき鬼神も又うとき人も聞きては心もやは

らぎ、仏も納受し給ふ。女の身として歌の道を知らぬは、あさましき事」と述べている。平安時代以後貴族女性は和歌を必修としたが、当代では庶民女性も学ぶことをすすめられたと考えられる。

以上の女子教育に関連すると思われる狂言をあげる。

① 小原の梅

黒木を売る女が「古今集」の和歌を暗じて自分が詠んだ歌の如く披露し、僧侶と和歌をきそって勝った。当代の僧侶は社会の知識層と考えられていたのでそこにおかしさがある。この狂言の中で僧侶は「歌は内裏上臈のもてあそびでこそあれ、賤の女のものではない」と云う。上代においては支配者も生産活動に従事し、労働を卑しいものとは考えなかった。しかし支配者が労働を卑しいものとして消費専門階級となった平安時代には、知的文化は支配者層の専有物となり、民衆は文学的資質を磨く機会と表現の場を失い、支配者と被支配者の文化に著しい隔りを生じた。しかし室町時代に到っては様相が変わり、庶民の女性も和歌を学んだといえる。

② 二九十八

清水の観世音へ妻乞いの祈誓をした男。観世音のお告げにより西の門の一の階段で待つ所へ女来る。やんごとなき女の姿。男は意を決して「そこにおわすは御夢想のお妻様か」と尋ねる。女は「つまもなき我が身一つのさごろもに、袖をかたく独り寝ぞする」と答える。男が「お宿は」といえば、「わが宿は春の日奈良の町の内、風の当らぬ里と尋ねよ」と。歌心を解した男は返歌する。「春日なる里とは聞けど室町の角よりしてはいくつめの家」女は「にく」とのみ答えて去る。男は女について考えた。「歌は詠める」「算勘もできる」「定めし美しいであろう」と。「にく」は「二九十八」のことと考えて男は尋ねて行く。女はさき（酒）を用意して待っていた。男女盃を交わし、男「千年も万年も添いましょう」。そこで男は被りものを無理に取り、顔を見て余りの悪女に驚き、「腹が痛い」などと逃げ腰。「ヤイヤイわ男やるまいぞ」と急に態度を変えて追う女。第五報で報告した十訓抄に「妻を選ぶにはかたちを先とすべからず、心を第一とせよ」とあり、源氏物語帯木の巻「雨夜の品定め」の

条に左馬の頭が女性の品定め結論として「今はただ品にもよらじ、容貌をばさらにも云はじ、ねじけがましき覚えだになくば、ただ偏に物まめやかに、静かなる心の趣」の女性が一番と述べている。しかし殆どの狂言で女の価値は容貌ではかられ、美しくなければ男性から疎外されている。行動的な当代庶民の女は男性と対等意識をもち、男の不誠実を攻めたてている。公家や武家の女性にはみられぬ庶民女性の強さと、庶民女性も和歌の学習をしたことを示すものといえよう。

③ 伊文字

まだ似合わしい妻をもたぬ主。太郎冠者を呼び出し、清水観世音へ妻乞いに行くとして供を命じた。主従の祈願の効あって観世音の御示現による女性に会う。

従者が一人出て「お宿は」と聞く。女性は「恋しくは問うてもきたれ伊勢の国、伊勢寺本に住むぞわらわは」と答えて去る。従者は「恋しくは問うてもきたれい」のあとを忘れて了う。思いあまって道に「歌関」を設けて通行人を呼びとめた。通行人は「ご政道正しい御代に、新関を据えるとは……」といぶかる。（室町時代幕府の政治には問題が多かったが、庶民は安穏な暮しと考えていたことが伺える。）従者は忘れた歌を思い出させてほしいそのために設けた関所であると説明する。通行人の協力でようやく歌の最後まで思い出した。主従は思い出した歌を吟じつつ、めでたく終わる。多くの狂言によれば問題がおきれば「物の本」を取り出し、そこから必要とする解決への示唆を引き出している。しかも古歌や朗詠がしばしばその鍵となっている。また古歌に倣って一首の歌を詠み出すのである。古歌を生活で受けとめ、それをもとにして、機知とユーモアを交えた歌を詠み出す才能を身につけていたことを示している。

④ 庵の梅

シテのお寮様（老尼）をはじめ登場人物は凡て女性である。庵に住まいするお寮様を若い女五人が尋ね、和歌の指導を受ける。庵の梅が美しく咲き香る春日の日である。お寮様は「梅は余の花とは違い、雪の中に咲き初め…」と述べて、紀貫行の歌「梅の香のふりおける雪にまがいせば、誰かことこと分けて折らまし」（古今集巻六）をあけて「何と面白いことではおりないか」という。娘たちは短冊に書きとめてきた各自の

歌をみてほしいとたのむ。（歌省略）ひとりひとりの歌を聞き終えたお寮様は満足そうによくできたとはめる。終って若い女達用の用意して来たささえ（携帯用酒筒）を出し、皆で飲んで舞い歌う。程よく酔も廻り娘たちが帰るとき、お寮様は「いともかしこき御世なれば、限り尽きせぬ敷島の、道を捨てさせ給ふな、乙女子たちよ、またこそ来ませ、木のもとに庵の梅こそ久しけれ」と歌道に精進することをすすめている。庶民の女性が和歌を家庭外で尼などに指導を受けたことを知ることができる。各自の歌を短冊に書いて集ったことから、手習いの道も修めていたと考えてよいであろう。

仏教の栄えた中世、仏教と文学とのかかわり、また僧侶・隠遁者の草庵が文学を生み出す一つの間であったことが理解できる。

⑤ 箕 被

家族のために生活の資をかせぐ責任のある夫が、「日泊り、夜泊り」で連歌にうつつをぬかし家庭を省みない。現実逃避の夫。久々に帰宅した夫は連歌の当番に当たったので仕度せよという。妻は遂に「内には水の絶えをもかまわせられぬか。はったと堪えがとうござる」。故に「暇をくれ」「暇をもらう代りにこなたの手より何かしるしをくれ」という。夫は妻が朝夕手がけた「箕を持って行け」と答える。「もはやわらわも、もうかう戻ります」「もはやおりやるか」。またこちらへ来たら寄れとの夫のことばを背に虚脱状態で箕を被って出て行く妻の後ろ姿をみた夫は発句を思いついて、「いまだ見ぬ二十日の宵の三日月は」と呼びかけた。里親も連歌をたしなむ妻。妻は人に歌を詠みかけられて脇をつけなくては、「後の世に口ない虫に生れる……」と引きかえして、「今宵ぞ出づる身こそつられ」とつけた。夫は妻の連歌の才能を初めて知って驚き、妻に詫びて引きとどめ、「今後は家で夫婦で連歌をたのしもう」という。改めて盃を交わし喜び合う夫婦の姿を描いている。自己本位の弱い夫、しかし謝る夫に妻の態度には情愛いづな女の姿がみえる。中世の女性の哀歎がにじみ出ている。この妻は連歌をたしなむ親から家庭で指導を受けたと考えられる。このほか「料理聲」などでも連歌に通じた妻を登場させている。

裁ち縫いの技について

室町時代の貴族の女子教訓書「めのとさうし」には、染め・織り・裁ち・縫う技の習練を強くすすめているが、狂言、お伽草子では直接この技の習得をすすめてはいない。しかし狂言「法師が母」ではこの点にふれている。

⑥ 法師が母（法師はかなぼうし、子供のこと）

酒の上で簡単に「出て行け」といった夫。「暇を貰うには夫の手より塵を結んでなりともしるしを……」という妻。夫の小袖を貰い、かなぼうしのことを気にしつつ妻は親里へ向った。妻が出て行くと忽ち酔もさめて、妻を恋し恋しと狂わんばかりに尋ね歩き、夫は尋ねあぐんで歌いつつ舞う。「法師が母の能には、まず春はわらび折る、さてまた夏は田を植え、秋には稲場に行き通り、冬になれば我が宿の背戸の窓にうち向かいて、六よみ布を織り付け、織りたる布は何何。素袍袴や十徳、布子の表、帷子をば誰が織りてくりょうぞ、法師が母ぞ恋しき」と。愛し合っているもことのはずみで争いとなり、夫婦の絆がこじれて妻が家を出る。夫婦の突然の断絶の中で味わう孤独が互いのかかわり合いを反省させ、仲直りした後は以前にもまして相互の理解が深まる夫婦生活の機微を表現している。なお、農村女性の年間の生活と女工、染め・織り・裁ち縫う技を身につけていたこと、さらに子供は男親につくものとした鎌倉時代以後の観念などを表現している。

3. 女性の気質と生活

第四報で報告した室町時代の女子（公家）教訓書「身のかたみ」で一条兼良は、「女は大六天魔王の眷属にて男の仏道をさまたげんために女となりて来れるものなり」と、女は魔性のものとしてその身を慎むことを訓し、さらに兼良が將軍義政夫人日野富子のために書いた「小夜のねざめ」の中では、「大かた女といふものはわかき時は親にしたがひ、ひととなりてはおとこにしたがひ、老いては子にしたがふものなれば、我身をたてぬ事とぞ申める。いかほどもやはらかに、なよびたるがよく侍ることにや」と、三従の道を説き、また「いきとしいけるもの、いかでか身をおさめざらん」と訓えている。これらの徳育は庶民の女子教育の理想にも反映したであらうことは、江戸時代の

町人・商家の女子教訓書「家内用心集」「分限玉の礎」その他の内容から推測できるが、実際に女性が一家の生計を背負わねばならなかった状態では、「いかほどもやわらかに」三従の道を守り通すのみでは生活できなかった。野性的な自由と、精力的、主体的な性格と行動が必要であったことが認められる。

各種の生産力の増大と市場の発達、商業の繁栄をみた室町時代、商売上の重要な役割を果たした女性の男まさりの姿を、狂言は数多くとりあげている。気楽で暮しむきを省みない夫は、働き者で口やかましい妻を「わわしい女」と呼んでいる。

(1) わわしい女を扱った狂言をあげる。

① 伯母ガ酒

濁酒を造りこれを商う気強い伯母。伯母の酒を金を払わず飲みたいとねらう甥。酒を売っている市場に行き、伯母にねだるが一滴も与えない。甥は「致しようがある」と、夜鬼に変装して伯母をおどし、酒蔵に入って酒を飲む。やがて伯母に正体を見破られ、厳しく追いかえされる。労働意欲のない人間には甥といえど商売物の酒は全く与えないわわしい女である。

② 河原太郎

妻は酒を造って売っている。怠け者の夫は市場の妻の許に行き、酒を要求するが妻は与えない。腹いせに夫は妻の売酒の悪口を云いふらして売れないようにする。立腹した妻は酒壺を出し「あく程飲めや」とたてつけに飲ませる。苦しくなった夫は「許いてくれ」と逃げる。妻は「ヤイヤイわ男これでもこりぬか」と追って行くわわしい妻を演出している。

③ 髭 櫓

洛中に住む大髭の男。禁中の大嘗会のまつりごとに大髭をもつ故に「犀の鉾」の役を仰せ出されて大喜びで帰宅する。役目を果たすためには髭の手入れをし、立派な衣装を用意しなくてはならぬ。家庭生活に無関心な夫は、暮し向きことは考えず、髭の手入れと衣装の新調を妻にたのむ。妻は「朝夕の煙さえたてかねる身代で……」とでもできぬ故辞退するようすすめたことから夫婦の争いとなる。「出て行け」と言う夫の声に飛び出した妻は、近所の女房どもと謀り、多勢で熊手、薙鎌など持って夫の居る家におしかけた。夫を皆で打ちめした上、大型毛抜きで問題の髭を「ぐっと

ぞ抜きにける。」女房どもはエイエイオウとかちどきをあげて引きあげて行く。生活を支える中世庶民の妻は夫の我儘に対して断固とした態度で対処している。兼良のいう「いかほどもやわらかに、なよびたる心」の持主であるわけにはいかなかったのであろう。

④ 呂 蓮

一夜の宿を求めた旅の僧侶を独断で泊めることにした夫。妻に食事の用意を命じ、その間、僧に頼んで説法を聞く。説話に感動した夫はその場で「出家させてほしい。このことはかねて親族一同、家族とも話し合っている」と言う。僧はその言葉を信じて男の頭を下す。思案した結果呂蓮と名も付けたところへ妻が現われ、ひとりと聞いていた僧がふたり、しかもひとりがかが夫である。立腹した妻は「元の頭にしてくれ」と言う。僧は「頼まれてした」と答え、夫は「僧にすすめられて仕方なく……」と云訳けをする。妻は夫と僧を相手に徹底的にせめたてる。家事一切を処理し、血縁近親の家族関係の調整に苦労し続ける妻。気の弱い夫でありながら妻に対する「いたわり」の気持はみられない。ただ自己中心の勝手な行動をとる夫。この中に男性中心の家庭生活のあり方が感じられる。夫はわわしい女と眉をひそめても妻は負けて引き下ってばかりはいられない現実をあらわしている。

⑤ 太鼓負い

神事の日夫の役柄は今年も警固だという。妻は、「毎年同じ役柄ではつまらない。庄屋殿に依頼して役替をしてもらわねば家に入れぬ」と強気である。夫は仕方なく庄屋に頼んで祭太鼓を負う役をもらった。祭の日背負った太鼓が打たれると男は痛くてならぬ。夫の苦痛を理解できぬ妻は「よい役になった」と、わが意を得たりと喜ぶ。夫は「これで家に入れてくれるか」。妻は「さきをつけて待っている、早く帰れ」という。妻にふり廻されている生活力のない夫とわわしい妻、中世のウーマンリブといえるのであろうか。晴れ晴れとした妻の笑顔を下から見上げる夫の姿が脳裏に浮かび、おかしさを誘う。

⑥ 右近左近

「泣く子と地頭には勝てぬ」という諺がある。その権力による裁判には公正を期し難いことも考えられる。牛に自分の田を食い荒された百姓右近は口下手で

ある。牛の飼い主左近を相手に地頭へ訴え出ると立腹している。口下手では地頭に理解されるように訴訟することはできぬと考えた妻は、訴訟の練習を右近にさせ、自らは地頭職代理をつとめて夫をさんざんにたたきのめす。立腹した右近は妻を左近びいきだと叫び、棒を持ち出して妻を叩こうとして反対に妻に打ちのめされる。妻は「勝ったぞ、勝ったぞ」右近は「左近びいきじゃ笑え笑え」と泣き笑いする。夫より思慮と知恵のある妻、これも女性上位の姿を端的に現わしているといえよう。しかし、家庭生活における女性上位も社会的立場を考察した時、「訴訟は夫がするもの」と考えているところに女性の地位の低さを示しているといえる。

⑦ 因幡堂

江戸時代男性側から一方的な離縁状で妻を離別する例が多くみられたが、室町時代においても夫婦の間で離婚について協議が行われたとは考えられない事実を狂言はとりあげている。先に述べた「二九十八」もその一例といえるが、因幡堂も同じ例である。酒好きの妻が親里へ行ったを幸い、いとま状を送った夫は、早速に因幡堂のお薬師へ妻乞の祈誓に行く。この様子を知った妻は立腹し、「あのような男は籬を蹴っても五人や七人は蹴出される。しかし、だまされたがくやしい」と、先廻りして因幡堂へ行き、神様に代って「西門の一の階段に立つ女を妻と定めよ」という。夫は神のご托宣と信じ、その女を伴って帰り盃を交わす。女は常の如くよく酒を飲んだ。盃終って女は被ぎを脱いで本性をあらわし、「このわ男め」とののしり、逃げる夫を追って行く。女性は自分に多少の非があっても男の一方的な離縁などの仕打ちに対して泣寝入りせず夫に反撥している。一条兼良の「わが身をたてず、三つに従う」とした教訓を庶民も理想としたであろうと考えられるが、わわしい女は自由に振舞い、権利意識の強さをみせている。

⑧ 鎌 腹

「夜泊り、日泊りを致し屋根の漏りまでわらわにさせます」と妻のいう生活力なき無責任な夫。たまたま家に帰った所、早速妻にせきたてられて鎌と^{おうそ}枒をもって山へ木こりに出かける。「またも夫婦いさかいをしたと、人々に後指さされ笑われるより死んでのきよ

う。」「死ぬにしても名の残るけなげな死様は」と考え、鎌で腹を切って勇ましく死ぬことを考え、その事を近所へふれて廻った。しかし、臆病で腹は切られない。とかくするうち話を伝え聞いた妻は、夫の死を思いとどませようとかけつける。「思いとどまらねば私が淵に身を投じて死ぬ。」と、詫びた妻。夫は死ぬと宣言した手前、世間体をつくろうことに悩み、妻にむかって「死ぬと云うが、同じ死ぬのなら某の名代に鎌で腹を切ってくれまいか」という。妻は「エエ腹立ちや、おのれ何としてくりょうぞ、アノわ男め」と、逃げる男を追う。決断力、実行力はなくただ人前をつくりたい気弱な男。気弱であるために人前をつくりうことを考えるのもあろう。ライシャワー博士はかつて「日本人は、自分がどう思うか、よりも、他人がどう思うか、が生活意識の中心となっている」と、指摘している。他人の思わくをまず気にして、表面をつくり自己の行為を規制する。現代も日本人には多いといえるのではないであろうか。

⑨ 石 神

日泊り、夜泊りして生活を省みないふがいない夫にあきらめをつけ「親里へ帰ります」と、仲人の所へ立寄った妻は「夫の気持は直らない」故別れたいと話す。夫は仲人に対し、妻が思いとどまるように説得してくれとたのむ。そこで仲人は妻に「日暮れて出雲路の夜叉神に伺いをたてて決めるよう」訓す。夫は先廻りして神のお告げの如く「夫の許へ帰れ」という。しかし妻に見破られて「ゆるいてくれ」と逃げる。この曲目も生活力をもつ女の強さを表現している。仲人は「果報はその身の生まれつき」と、宗教的因果関係をもとに妻を納得させようとしているところに、女性のみ服従を求める社会意識が伺える。室町時代の主従関係は、「力あるところに主人がある」という風潮であった。しかし夫婦相互間の意識にはこの風潮とは関係なく、気強い妻も夫との協力を最も望んでいると思われる。

男まさりの女、わわしい女を扱った狂言はこの他に「千切木」「瘦松」「喰り」「引くくり」などを挙げることができる。

(2) さまざまな女心を狂言にみる

① 釣 針

西の宮戎神社に妻乞の祈誓をした男へ神のお告げは、「下向道の浜辺におかれた釣針で思う女を釣れ」とのこと。従者に命じて妻や下女まで釣らせた。主のために女を釣った従者は自分も美しい妻を一人釣りたいと願って許される。忽ち多数の女を釣り得たが、気に入る美女がない。釣られた女達は自分達の中から選べとせまる。従者は「ヤレヤレ」と逃げる女を追って行く。女に釣られた男を扱った狂言は見当らない。生活力をもった女性の多かった室町時代とはいえ、多数の女が男の針に釣りあげられたとする事は何故であろうか。依存心の強い女はいつの時代にも存在することを示すものとみられる。

② 鏡　男

越後の国山家の男が都からの土産として妻へ鏡を買う。初めて鏡を見る妻。鏡に写る自分の姿を他の女がいると感違いし、嫉妬してわめきたてる。生産力の発達した室町時代でも鏡を初めて見る山家の農民の生活の貧しさと、妻女の夫への平素の不信感、嫉妬深い女心をあわれに思わずにはいられない。

③ わ　か　め

室町時代商品流通の発展とともに、人身売買もさかんになった。幕府は人身売買禁止の布告を出しているが現実には「人商い」はめずらしくなかった。商業の繁栄によって富み栄えた町人のあった反面、貧しい庶民が多かったことを示すものである。男が妻を売り渡すとき、「何事も某のためじゃと申うて」と説得すれば、「あなたのためならば……」と、女は涙ながらに従っている。夫のために妻が犠牲となることを日常のこととした武家女性の気風が、中世庶民の女性にもみられたと考えられる。

④ 花　子

洛外に住む男が東への旅の途中、美濃の国の宿で会った女性花子のやさしさに心引かれた。花子は北白川に宿をとり会いたいと言って来た。男も行きたいがかわいしい妻が片時も傍を離れない。外出の口実を考えると妻は許さぬ。遂に一夜持仏堂で座禅をすると、妻の許しを受けた夫は直ちに従者を呼び、身代りに座禅させて自分は花子の許へ。しかし妻は気づいて身代りの者と交替して座禅の席にいる。夜明けとともに帰宅した夫は真相を知らず座禅している人物に一夜の事を話

す。聞き終えて妻は顔を出し、「ヤイわ男、腹立ちや食い裂いてのきょうか」とせめたてる。「ゆるさしめ」と逃げる夫を妻は追うて行く。「かげろう日記」「空穂物語」「源氏物語」でも明らかな如く、古代から封建社会を通じて一夫多妻の婚姻形態が続けられた中で女性の悩み、苦しみ、嫉妬したのである。源氏物語では、葵の上の死後光源氏と夫婦の間柄に入った紫の上、最も幸福なるべき地位におかれた彼女も、源氏の多情には多くの苦難を味わった。嫉妬の感情ははげしかった。しかし「物怨じし給へるが、なかなか愛敬づきた」様に振舞い、さらに女三の宮の出現の後の苦しい胸のうちは、ひたかくしにかくし通した紫の上であるが、すべての女性がひとしくでき得ることではない。かげろう日記の著者はその全巻に夫兼家に対する女の苦しみを書きあらわしている。お伽草子では「磯崎」「あいそめ川」などに後妻打のことがみられる。追出された先妻が後妻のもとに先ぶれをし、女だけで身分相応の人数を集める。先妻は竹刀その他すりこ木、なべ蓋などを手にしておしかけ、互に打ち合う。仲人が機を見て中に入り引きあげさせるのである。積もり積もった心の憂さを発散させたものであろう。女の「さが」の悲しさをみる心地がする。「花子」と同様女の嫉妬を内容とする狂言は「鈍太郎」「家童子」など十指にあまる。

⑤ 猿　座　頭

室町・江戸時代「はり」「灸」「あんま」は失明者のみに許された職業で、失明者は資格試験によって、檢校・別当・勾当・座頭の四階層に大別されており、上位の者は社会的地位も高く経済的にも安定していた。また、失明者には琵琶法師として芸能で身をたてる者も多かった。夫の座頭と共に花見に出かけた妻女。猿曳男が妻に誘いをかける。座頭は妻がそわそわするので平家物語を語る間妻をくくっておいた。やさしく仕える妻にも絶えず不安を抱く失明者の心の痛みからであろう。一時の甘言に心迷わし、猿を身代りに綱でくくり、男と逃げた妻。その原因が座頭との平素の生活の中にうっ積っていたのであろうか。ゆらぐ女心をあらわし、異性に心移すのは男性のみでないことを物語っている。しかし、女の不貞を扱った狂言はきわめて少ない。

Ⅲ 結 語

庶民の女性の教育・生活を狂言を中心に考察した結果

1) 庶民は地位や面子を維持するための学問は特に必要としなかった。学習の動機は生活の必要からで、他から強いられたものではなく、虐げられた境地から脱し、貧困から自らを救い、人間らしい生活を回復するためのものであった。すなわち階級を超越して普及した仏教の平等観と下剋上の社会思潮は庶民の自覚を促したのである。従って庶民教育の内容は、日用の手紙や商業上の読み書き、算道を中心としたため、手紙文を集録した「庭訓往来」などの往来物が学習に用いられた。

知的教育が重視されたとは考えられない庶民の女性も読書、簡単な手習い、算道のほか伝統的な和歌に加えて連歌、舞踊、裁ち縫いの技なども学習したことを確認した。

2) 今日も女性として、人間としてのぞまれる「やさしさ」について考えると、庶民の女性は優雅に装い、いかほどもやわらかに、なよびたる心で常時いることのできない境地、やさしくない生き方を強いられる環境におかれることが多かったといえるのではないであろうか。生活力、行動力をもち主体的に振舞う必要があったといえる。男まさりで、気が強く、夫と対等の

意識をもつ妻が多かった。そのため生活を省みない自己中心的な夫、多情な夫には強い態度で対処する姿勢をみせている。

3) 婚姻はようやく嫁入婚の形態が定着し、同居の形をとる場合が多くみられる。

4) 全般的には庶民の社会的地位は依然高いとはいえず、経済的に豊かであったとはいえないが、生き生きとした人間の生活、血の通った力強い家庭生活の営みが感じられる。

参考文献

- | | |
|-----------|---------------|
| 狂言集 | 高木市之助・西尾実，他監修 |
| 謡曲集 | 同上 |
| お伽草子 | 市古貞次 校注 |
| 源氏物語 | 山岸徳平 校注 |
| 源氏物語女性像 | 竹村義一著 |
| 日本の歴史 | 井上清著 |
| 日本教育通史 | 尾形祐康著 |
| 日本文化史 | 家永三郎著 |
| 女性教育史 | 志賀匡著 |
| 庭訓往来 | 石川謙 校注 |
| 日本教育文庫女訓篇 | |
| 日本文化史Ⅳ | 辻善之助著 |
| | 吉野・室町時代 |
| | 安土・桃山時代 |

Summary

The so-called Muromaohi Civclization chiefly produced by common people and amalgamated by nobles, had developed socially and regionally on a large scale in Muromachi Era.

We could nominate as representative performing arts at this period, No(Noh), Kyōgen(Noh farce), Kadō (Floral arts), Sadō (a Tea ceremony) and, as literature, Otogi-zoshi (a book of stories for women and children) which were easy to read and entertainable too.

In this report, the common women's culture and livings are observed principally through Noh farce which described livings of common people in many cases: The results is as follows.

1. The education for the common women on scholarship could not be considered to have been emphersized, but simple readings, practicing penmanship, mathematics, addition to these, traditional Waka (Japanese poems), Renga (a linked-verse) and Buyō (a Japanese dance) were constructed in family lifie of common people mainly from the point of necessity

At this time, temples were center of eduction because priests had formed an intellectual class in the Era. Therefore, the common women were taught also by nuns at nunneries.

2. As for the humanity, many of them were women of full of vitality and activity comparing with those of warriors. They were wives of strong mind and spirit. They stood on an equal conscious with husbands and supported their households instead of their husbands.

As the consequence, they behaved with severe attitude to the wantonness of their husbands.

3. The marriage had fixed by this time a form of Yomeiri-kon generally, that is, brides lived with bridegrooms together at bridegrooms' houses.

4. Though the status of common people can not be remarked to have been high socially and rich economically, it is noticeable that vivid human lives and forceful livings with flesh and blood are able to be observed.